

「大工と鬼六」は日本の民話か

高橋 宣勝

日本口承文藝學會第十回研究例会（一九八六年十月）において、ぼくは表題のタイトルで研究発表をした。これは、従来国産話とみなされてきた「大工と鬼六」が実は北欧教会建立伝説の翻案であるという仮説の発表であったのだが、この仮説が次の例会（十二月）で会員の櫻井美紀氏によって実証された。櫻井氏は「大工と鬼六」の原話（「鬼の橋」）を発見され、その著者（水田光）自らその話が北欧教会伝説の翻案である旨解説していることを明らかにしたのである。当学会誌には櫻井氏がこの間の事情について詳しく論及する予定とうかがっている。従って「大工と鬼六」翻案説は櫻井氏の論文で十分なのだが、編集部の御好意に甘えて既に用済みの仮説も紹介させてもらうことにした。但し、この仮説は岩波書店発行の『文学』（一九八八年二月号）において既に詳述してあるので、ここでは要旨を述べるにとどめてある。

一

「大工と鬼六」が北欧の教会建立伝説に似ているという指摘は既

に十年も前になされていた。しかし柳田国男が我国の基本話と規定したこともあって、この昔話はこれ迄常に純国産の話とみなされ、曰く、鬼は川の神の零落した姿である、目玉の要求は人柱伝習の痕跡である、名当てによる解決は化物問答と同工である、といった我國の民俗伝習に則した解釈がなされてきた。

「大工と鬼六」に似ているという北欧教会伝説とはスウェーデンとノルウェイに伝わる教会建立譚で次のようなものである。

聖オーラフ（あるいは聖ラオレンティウス）が大教会を建てようと思案しているとトロールが現われて建ててやろうと申し出る。しかし教会完成のあかつきには報酬として太陽と月、あるいは聖人自身（又は聖人の目玉）をよこせ、ただし名前を当てるなら全ていらぬ、という。聖人は承諾する。やがて教会が尖塔を残して全てでき上ったとき、聖人は思いあぐねて山の中へと入って行く。すると唄がきこえてきた。それは赤児をあやしているトロールの女のうたう子守唄であり、女は「もうすぐ父ちゃんの Vind och Veder（あるいは Find）がおみやげをも

「帰ってくるからね」と歌っていたのである。聖人は喜んで教会へと走り、今まさに尖塔を据えようとしているトロールに向ってその名を呼ぶと、トロールは尖塔から落ち地面に当って砕け散り、その破片の各々は火打ち石になった。(あるいは、名を呼ばれた瞬間トロールは石になってしまった)

この伝説の聖人を大工に、トロールを鬼に(実際、トロールは山に棲む巨人だから鬼はまさしく日本版トロールである)、教会を橋に代えると話はほとんど「大工と鬼六」になる。目玉の要求という特殊なモチーフまで一致しているのである。

一般に、類似の話が全く別の場所で語られているとき、それは各々独自に発生したものか、あるいは一方から他方へ伝えられた結果であるか、そのいずれかであろう。「大工と鬼六」はこれ迄純国産の話とみなされてきた。従って北欧の教会伝説との類似は偶然の一致ということになる。しかしこの類似は偶然というには余りにもよく似ている。そこでこの教会伝説についてスウェーデンの民俗学研究所へ問いあわせてみた。

すると、この伝説は北欧の何百という教会で、その建立譚として語られているものだという。歴史的時間を考えるならまさしく国民的伝説である。一方「大工と鬼六」は昭和六年(一九三一)に佐々木喜善の『聴耳草紙』に採録されて初めて注目を浴びたが、今日までまだ五例しか採話されていない。広範な伝承を誇る北欧教会伝説の存在を考えると、「大工と鬼六」の国産性がにわかに危うくみえてきた。

二

そこで「大工と鬼六」の国産性を検証してみることにした。ここで用いた方法は我国昔話世界の伝統である。昔話に限らず口承文芸は一般に保守的で、イメージやモチーフや構造に独特の様式性があり、そうした伝統パターンを基準として国産性の問題に探りを入れてみるのは十分に妥当であろう。

この方法によって「大工と鬼六」を調べてみると従来の解釈の全てが我国の伝統にそぐわないことが判明した。すなわち、

①鬼は川の神であるか……我国の昔話において鬼が川の神であることは無い。川の神になりうるのは川に棲むものや水に関係あるものが常である。ところが鬼の住処は伝統的に山や島である。「大工と鬼六」でも鬼の子は山の中にいて鬼六の帰りを待っている。つまり鬼六の住処は山の中である。その鬼が川の神というのは矛盾であり伝統に反する。

②目玉の要求は人柱伝習の痕跡か……これは一般に超自然者の援助と要求というタイプのモチーフである。この話型は我国では「蛇掣入(水乞型)」などの異類譚が代表格であるが、我国の伝統ではこの異類は常に娘を要求する。娘を嫁にもらうという条件で援助するのである。そして又、異類がこの娘によって殺されてしまうというのも我国の伝統である。この伝統に従うなら、鬼六は大工の娘を要求して然るべきだったろう。そして大工の娘は何らかの策を用いて鬼を死に至らしめただろう。ところが鬼六は大工の目玉を要求

した。これは伝統から外れているのである。

このモチーフは又人柱伝説の観点からみても伝統的でない。なぜなら我国の人柱伝説は、「長良の人柱」に代表される如く、全て、(イ)架橋に際して人柱が必要となる、(ロ)ある人が人柱選定法を提言する、(ハ)提言者が人柱にされる、という構造をもち、川の神は決して姿を現わさず、橋を架けるのは常に人間とままつているからである。「大工と鬼六」が人柱伝習と関わっているとすれば、川の神(鬼)が自ら姿を現わし橋を架けるということになってしまう。これは我国の人柱伝説に全く反することである。

③鬼の名当では化物問答と同工か……化物問答とは、例えば、「四足八足大足二足横行左行眼天ニアリ」の化物がカニと云い当てられると退散する「蟹問答」の如く、化物が自らの正体をナゾで問い、云い当てられて逃げて行くというものである。これと鬼六の名当では断じて同工ではない。鬼六は、大工の目玉をとるために、自分の名前を少しでも漏らすようなことをしてはいけない。正体をさらけだしてしまう感のある化物とは全く立場を異にしているのである。つまりこの名当でも我国の伝統(化物問答)にそぐわないのである。この名当では、しかし、西洋でポピュラーなモチーフである。グリムの「ルンペルシュティルツヒェン」がその代表で、超自然の援助者の名前は大抵山の中で唄によって漏れてしまうということになっている。

三

純国産話という前提のもとになされてきた従来の解釈は以上のように全て我国の伝統から逸脱している。これをいかに考えるべきか。ひとつのモチーフの逸脱ならそれを例外とすることもできよう。しかし伝統逸脱は「大工と鬼六」全体に亘るもので、この話そのものが例外的な存在なのである。この場合とるべき道は二つしかない。一つは、いかに伝統から外れていようと異色の話としてあくまでも国産話とみなすことである。もう一つは外国の翻案物と考えることである。だが、既に名当でのモチーフがこの話の西洋起源を十二分に示唆している。しかもこの話と基本的に同一の北欧教会建立伝説がある。伝統逸脱、採話例の少なさを、世に知られるようになったのが昭和の初めという歴史の浅さ——こうしたことはみな「大工と鬼六」が北欧教会伝説の翻案であることを語っているだろう。

× × ×

この発表の時、ぼくは更に「大工と鬼六」はキリスト教がまだ邪教のイメージを残している時に宣教師と信者とによって教会伝説からつくられたのではないかと推測も述べた。しかし事実は水田光という一女性の手になるものだった。水田は目玉の要求のモチーフも自分の創作であると云っているが、これは直ちに首肯できない。又、水田の用いた種本として蓋然性が高いと思われるものに今のところ L. Uhlund : *Der Mythus von Thor* 2) William A. Craigie : *Scandinavian Folk-Lore* があつた。これは大林太良先生がみつけた教として下さったものである。

(たかはし・のぶかつ／北海道大学)